

深イ〜話!

No.23

「困った、という言葉、決して吐かない」――

これが、絶体絶命のピンチを、何度も鮮やかに切り抜けた、高杉晋作の秘訣であった。

いかなる窮地に陥っても、「なんとしても打開してみせる」という、前向きな気持ちを持ち続ければ、必ず意外な方向に活路が見えてくる。「窮すれば通ず」といわれるとおりだ。

反対に、「困った」という後ろ向きな言葉を吐いたとたんに、知恵も分別も出なくなる。窮地が死地（きゅうち しち生き延びる望みのない場所）になってしまい、それで本当に終わりになるのだ。

高杉は、長州藩の同志に、常にこのように語っていたという。



幕末における高杉の活躍はめざましかった。

よい例が、幕府艦隊との海戦である。

徳川幕府は、長州藩を攻略しようと、千トン級の軍艦を中心とする大艦隊を派遣した。これに対し、長州にはまともな軍艦がない。誰もが「困った」「とても勝ち目がない」と騒いでいた。

急報に接するや、高杉は直ちに「幕府艦隊に海戦を挑む」と宣言し、わずか二百トンの豆軍艦一隻で出撃した。従った若者たちも、この命令には度肝どぎもを抜かれたという。

海戦に夜襲は不可能というのが世界の常識であった。だが、高杉率いる豆軍艦は、深夜の奇襲作戦を敢行した。大島沖に停泊していた軍艦、無数の帆船、和船は大混乱を起こし、見事勝利を収めている。単なる無謀ではない。活路を見いだすべく熟慮したうえでの断行であった。

彼は、誰もが絶望視している状態から、信じられない勝利を呼ぶ活躍を何度も演じている。

「困った、という言葉、決して吐かない」

このプラス思考が、己をも前向きにし、周りの人をも奮起させる原動力であったのだ。